

中学生の登校回避感情に関連する要因の検討

—中日対比—

陳 燕 群 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

島 義 弘 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

An examination of the factors related to junior high school students' feelings leading to school avoidance:

A comparison between China and Japan

CHEN Yanqun and SHIMA Yoshihiro

キーワード：登校回避感情、ストレス、ソーシャルサポート、テスト不安、中日対比

目的

現在、学校は様々な深刻な問題を抱えている。日本では不登校問題、特に中学生に関する実態が深刻になっている。森田（1991）は欠席願望を持ちつつ登校する児童生徒を「グレイゾーン」と名付け、その生徒は容易に不登校に陥る。不登校に至らずとも「学校に行きたくない」という気持ち、「登校回避感情」を抱えている児童・生徒の数は少なくない。日本では通学しているものの学校に行きたくないと感じることがある「不登校傾向」の中学生が約 33 万人に上るとの推計結果がある（日本財団，2018）。今登校している子ども達はその感情にうまく対処できなくなると、不登校に陥るリスクが高まると考えている（森田，1991）。一方、中国では「厭学」（勉強嫌い）、「逃学」（学校をさぼる）、「輟学」（途中で退学する）、「失学」（貧困あるいは教育条件の不備などにより学齢児童が学校に行けない状態）などのような言い方があるが（翟，2006）、日本で言われている「不登校」概念に符合するものはない。

本研究は、学校に行きたくないという登校回避感情を不登校の予兆と考え、この感情を抱く子どもたちの内部要因、あるいは外部環境との関連を検討する。さらに、ソーシャルサポートが登校回避感情を緩和・軽減する効果についても検討する。本研究の知見を基に、登校回避感情を抱きつつも登校を続けている児童生徒の心理的な健康を守り、早期発見、早期予防の一助としたい。また、日本で登校回避感情について多く研究されてきた情報を中国の状況に合わせて、中国の中学生の登校回避感情の関連要因を明らかにし、その間の国の文化差と学校規模による差を検討することを目的にした。

方法

調査協力者

日本では、A 県の大規模中学校 B の生徒 820 名（男性 408 名、女性 412 名）、中規模中学校 C の

生徒 390 名 (男性 194 名, 女性 194 名, 不明 2 名), 小規模中学校 D の生徒 37 名 (男性 21 名, 女性 16 名) を対象とした。中国では, E 省の大規模中学校 F の生徒 356 名 (男性 169 名, 女性 183 名, 不明 4 名), 中規模中学校 G の生徒 196 名 (男性 115 名, 女性 73 名, 不明 8 名) を対象とした。なお, 日本では全数調査を原則とし, 中国は抽出調査とした。

質問紙の構成

日本と中国で同じ尺度を用いた。最初に日本語版を作成し, それを翻訳して中国語版とした。中国語版の作成に当たっては, 第 1 著者が中国語訳したものを日本語が堪能な中国人大学院生と中国語のできる日本人大学生, 漢文学を専門とする大学教員がチェックし, 翻訳による意味のずれが生じないように, 留意した。

登校回避感情 渡辺・小石 (2000) が作成した登校回避感情尺度を用いた。「学校への反発感傾向」11 項目, 「友人関係における孤立感傾向」9 項目, 「登校嫌悪感傾向」6 項目で構成される。回答は 1 (当てはまる) から 5 (全然当てはまらない) までの 5 件法で求めた。

ストレッサー 岡安・高山 (1999) が作成した中学生用ストレッサー尺度簡易版とテスト不安尺度 (坂野, 1988) を用いた。中学生用ストレッサー尺度簡易版は「学業」4 項目, 「先生との関係」4 項目, 「友人関係」4 項目で構成される。回答は 0 (全然なかった) から 3 (よくあった) までの 4 件法で求めた。テスト不安尺度は Sarason (1972) が作成した Test Anxiety Scale の邦訳版である。16 項目の質問に対して, 0 (いいえ) と 1 (はい) の 2 件法で回答を求めた。

ソーシャルサポート 岡安・高山 (1999) が作成した中学生用ソーシャルサポート尺度簡易版を用いた。4 つのサポート源 (お父さん, お母さん, 先生, 友達) のそれぞれについてのソーシャルサポートの期待について, 1 (違うと思う) から 4 (きっとそうだと思う) までの 4 件法で回答を求めた。

手続き

無記名による質問紙調査を行った。各校の教諭が調査の主旨や回答に関する注意点を説明し実施した。記入済の回答用紙を後日郵送にて回収した。

分析 1: 日本のデータ

先行研究に従って尺度得点を求め, 信頼性係数を算出したところ, 満足のいく値が得られた ($\alpha = .727-.927$)。なお, ソーシャルサポートの「お父さん」と「お母さん」の相関が高かったため ($r = .728$), 両者を合成して「親」という変数を作成した。各下位尺度の記述統計量を Table 1 に示した。

学年差・性差の検討

学年と性を独立変数とした 2 要因分散分析を行った。多重比較には Tukey の HSD 法を用いた。

登校回避感情 「学校への反発感傾向」は 1 年生より 2・3 年生の得点が高かった ($F(2, 1222) = 6.595, p < .001$)。

ストレッサー 「学業」は学年の主効果 ($F(2, 1237) = 9.934, p < .001$) と学年×性の交互作用 (F

Table 1 記述統計量と*t*検定の結果（国別）

	日本			中国			<i>t</i> 値	<i>d</i>
	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
学校への反発感傾向	1230	2.572	0.723	509	2.357	0.756	5.556 ***	0.293
友人関係における孤立感傾向	1212	1.872	0.610	519	2.212	0.669	-9.949 ***	0.542
登校嫌悪感傾向	1238	2.728	0.897	528	3.074	0.885	-7.464 ***	0.388
学業	1245	1.410	0.803	540	1.669	0.683	-6.953 ***	0.336
先生との関係	1220	0.767	0.836	536	1.167	0.747	-9.975 ***	0.495
友人関係	1238	0.506	0.645	540	1.011	0.624	-15.321 ***	0.790
テスト不安	1222	0.475	0.201	531	0.588	0.229	-9.788 ***	0.536
親	1108	3.034	0.854	500	2.775	0.859	5.610 ***	0.302
先生	1184	2.490	0.918	501	2.691	0.840	-4.356 ***	0.224
友達	1192	3.206	0.773	507	2.934	0.826	6.323 ***	0.344

*** $p < .001$

(2, 1237) = 3.277, $p < .05$) が有意であった。単純主効果検定の結果、男性の場合には2年生より3年生の、女性の場合には1年生より2・3年生の得点が高かった。「先生との関係」については学年 ($F(2, 1212) = 7.816, p < .001$) と性 ($F(1, 1212) = 26.963, p < .001$) の主効果が得られた。2・3年生は1年生より、男性は女性より得点が高かった。「友人関係」については2年生より1年生の得点が高かった ($F(2, 1230) = 4.358, p < .05$)。また、「テスト不安」は2年生より3年生の得点が高かった ($F(2, 1214) = 3.882, p < .05$)。

ソーシャルサポート 「先生」については2・3年生より1年生の得点が ($F(2, 1176) = 6.292, p < .01$)、 「友達」は男性より女性の得点が高かった ($F(1, 1184) = 50.003, p < .001$)。「親」については学年 ($F(2, 1100) = 6.325, p < .01$) と性 ($F(1, 1100) = 4.558, p < .05$) の主効果が認められた。2・3年生より1年生、男性より女性の得点が高かった。

登校回避感情の学校規模別の検討

学校規模別の各下位尺度の平均値を Table 2 に示した。学校の規模が生徒の登校回避感情に与える影響を検討するため、学校規模を独立変数とした1要因の分散分析を行ったところ、「学校への反発感傾向」は学校の規模が大きいほど得点が高かった ($F(2, 1227) = 13.618, p < .001$)。「友人関係における孤立感傾向」と「登校嫌悪感傾向」には学校規模による差は見られなかった。

登校回避感情尺度と各要因の関連についての学校規模別の検討

中学生の登校回避感情に対する増悪要因と防御要因を検討するため、第1ステップにストレスサー、第2ステップにソーシャルサポートを投入した階層的重回帰分析を行った (Table 3, Table 4, Table 5)。調査協力者数に大きな差異があるため、以下、標準偏回帰係数 (β) が0.150以上のものについて解釈する。

学校への反発感傾向 「先生との関係」にストレスを感じているほど得点が高く (大: $\beta = .426$; 中: $\beta = .385$; 小: $\beta = .455$)、 「先生」からサポートを得ているほど得点が低かった (大: $\beta = -.338$; 中: $\beta = -.396$; 小: $\beta = -.182$)。また、大規模校では「学業」 ($\beta = .167$) が増悪要因として、小規模校では「友達」 ($\beta = -.404$) が防御要因として機能していた。

Table 2 学校規模別の平均値, 標準偏差と分散分析の結果 (日本)

	大規模校		中規模校		小規模校		分散分析	
	M	SD	M	SD	M	SD	F値	η^2
学校への反発感傾向	2.634	(0.718)	2.485	(0.720)	2.108	(0.595)	13.618 ***	0.022
友人関係における孤立感傾向	1.895	(0.609)	1.813	(0.610)	1.978	(0.600)	2.855	0.050
登校嫌悪感傾向	2.768	(0.906)	2.663	(0.892)	2.527	(0.709)	2.743	0.004
学業	1.465	(0.806)	1.325	(0.787)	1.081	(0.780)	7.273 ***	0.012
先生との関係	0.759	(0.847)	0.833	(0.825)	0.216	(0.405)	9.43 ***	0.015
友人関係	0.538	(0.636)	0.461	(0.671)	0.264	(0.482)	4.626 **	0.007
テスト不安	0.490	(0.205)	0.455	(0.188)	0.370	(0.187)	9.541 ***	0.015
先生	2.416	(0.927)	2.602	(0.886)	2.938	(0.807)	9.754 ***	0.016
友達	3.175	(0.782)	3.290	(0.736)	3.000	(0.888)	4.121 *	0.007
親	2.996	(0.856)	3.133	(0.829)	2.798	(0.997)	4.296 *	0.008

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 3 学校への反発感傾向 (日本)

	大規模校		中規模校		小規模校	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
学業	.167 ***	.142 ***	.076	.058	-.015	-.067
先生との関係	.426 ***	.271 ***	.385 ***	.245 ***	.455 *	.297
友人関係	.091 **	.050	.054	.001	.071	.033
テスト不安	-.038	-.039	-.008	.001	-.089	.049
先生		-.338 ***		-.396 ***		-.182
友達		-.067		-.108 *		-.404
親		-.125 **		-.068		.077
R^2	.293 ***	.465 ***	.180 ***	.392 ***	.241	.438 *
ΔR^2		.172 ***		.212 ***		.197

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注: β の絶対値が0.150以上のものをボールド体で示した。

友人関係における孤立感傾向 「友人関係」にストレスを感じているほど得点が高く(大: $\beta = .288$; 中: $\beta = .335$; 小: $\beta = .483$), 「友達」からサポートを得ているほど得点が低かった(大: $\beta = -.441$; 中: $\beta = -.463$; 小: $\beta = -.374$)。また, 小規模校では「学業」ストレス ($\beta = -.301$) と「先生」からのサポート ($\beta = -.271$) が友人関係における孤立感傾向を低めていた。

登校嫌悪感傾向 「友人関係」にストレスを感じているほど得点が高かった(大: $\beta = .255$; 中: $\beta = .275$; 小: $\beta = .533$)。さらに, 大規模・中規模校では「先生との関係」(大: $\beta = .157$; 中: $\beta = .187$) も登校嫌悪感の増悪要因となっていた。また, 「学業」ストレスについては, 大規模校では増悪要因 ($\beta = .152$), 小規模校では防御要因 ($\beta = -.298$) となっていた。ソーシャルサポートについては, 大規模・小規模校では「友達」(大: $\beta = -.233$; 小: $\beta = -.203$), 小規模校では「親」($\beta = -.275$) のサポートの有効性が確認された。

Table 4 友人関係における孤立感傾向（日本）

	大規模校		中規模校		小規模校	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
学業	.091 *	.059	-.035	-.027	-.301	-.378
先生との関係	-.022	-.021	.003	.073	.087	-.132
友人関係	.288 ***	.189 ***	.335 ***	.224 ***	.483 *	.457 *
テスト不安	-.074	-.055	.061	.077	-.034	.145
先生		-.034		.123 *		-.271
友達		-.441 ***		-.463 ***		-.374
親		-.057		-.134 *		.005
R^2	.095 ***	.322 ***	.115 ***	.348 ***	.256	.534 *
ΔR^2		.227 ***		.232 ***		.278 *

*** $p < .001$, * $p < .05$

注: β の絶対値が0.150以上のものをボールド体で示した。

Table 5 登校嫌悪感傾向（日本）

	大規模校		中規模校		小規模校	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
学業	.152 ***	.130 ***	.071	.061	-.298	-.366
先生との関係	.157 ***	.107 **	.187 ***	.158 **	.105	-.004
友人関係	.255 ***	.199 ***	.275 ***	.228 ***	.533 **	.516 *
テスト不安	.097 **	.105 **	.118 *	.117 *	.125	.246
先生		-.129 **		-.106		.026
友達		-.233 ***		-.138 *		-.203
親		-.060		-.129 *		-.275
R^2	.202 ***	.314 ***	.183 ***	.266 ***	.297 *	.457 *
ΔR^2		.112 ***		.083 ***		.160

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注: β の絶対値が0.150以上のものをボールド体で示した。

分析 2：中国のデータ

日本のデータと同様に尺度得点を求め、信頼性係数を算出したところ、概ね満足のいく値が得られた ($\alpha = .646\text{—}.860$)。なお、ソーシャルサポートの「お父さん」と「お母さん」の相関が高かったため ($r = .634$)、両者を合成して「親」という変数を作成した。各下位尺度の記述統計量を Table 1 に示した。

以下、日本のデータと同様の分析を行った。

学年差・性差の検討

登校回避感情 「学校への反発感傾向」は3年生が1・2年生より ($F(2, 493) = 7.102, p < .001$)、男性が女性より ($F(1, 493) = 9.118, p < .01$) 高かった。「友人関係における孤立感傾向」は男性より女性の得点が高かった ($F(1, 502) = 7.062, p < .01$)。「登校嫌悪感傾向」は2年生より3年生の得点が高かった ($F(2, 510) = 4.785, p < .01$)。

ストレッサー 「学業」は学年の主効果 ($F(2, 521) = 9.434, p < .001$) と学年×性の交互作用 ($F(2,$

521) = 3.328, $p < .05$) が有意であった。単純主効果検定の結果、2年生において男性より女性の得点が高かった。「先生との関係」については、学年 ($F(2, 521) = 3.782, p < .05$) と性 ($F(1, 517) = 6.595, p < .05$) の主効果が得られた。3年生は1年生より、男性は女性より得点が高かった。「テスト不安」については学年 ($F(2, 512) = 3.683, p < .05$) と性 ($F(1, 512) = 12.400, p < .001$) の主効果が得られた。3年生は2年生より、女性は男性より得点が高かった。

ソーシャルサポート 「先生」は3年生より2年生 ($F(2, 482) = 3.756, p < .05$)、「親」は3年生より1年生の得点が高かった ($F(2, 481) = 3.114, p < .05$)。「友達」については学年 ($F(2, 488) = 4.216, p < .05$) と性 ($F(1, 488) = 13.219, p < .001$) の主効果が有意であり、2・3年生は1年生より、女性は男性より得点が高かった。「親」については学年 ($F(2, 1100) = 6.325, p < .01$) と性 ($F(1, 1100) = 4.558, p < .05$) の主効果が認められた。2・3年生より1年生、男性より女性の得点が高かった。

登校回避感情の学校規模別の検討

学校規模別の各下位尺度の平均値を Table 6 に示した。学校規模を独立変数とした t 検定を行ったところ、中規模校より大規模校の「登校嫌悪感傾向」が高かった ($t(526) = 3.438, p < .001$)。

登校回避感情尺度と各要因の関連についての学校規模別の検討

中学生の登校回避感情に対する増悪要因と防御要因を検討するため、日本と同様の階層的重回帰分析を行った (Table 7, Table 8, Table 9)。日本のデータの分析と同様、 β が 0.150 以上のものについて解釈する。

学校への反発感傾向 「先生との関係」にストレスを感じているほど得点が高く (大: $\beta = .386$; 中: $\beta = .417$)、「先生」からサポートを得ているほど得点が低かった (大: $\beta = -.275$; 中: $\beta = -.310$)。また、大規模校では「学業」($\beta = .209$) が、中規模校では「友人関係」($\beta = .194$) が増悪要因となっていた。

友人関係における孤立感傾向 「友人関係」にストレスを感じているほど得点が高く (大: $\beta = .259$; 中: $\beta = .358$)、「友達」からサポートを得ているほど得点が低かった (大: $\beta = -.407$; 中: $\beta = -.265$)。また、中規模校では「先生」からのサポートも防御要因となっていた ($\beta = -.192$)。

Table 6 学校規模別の平均値、標準偏差と t 検定の結果 (中国)

	大規模校		中規模校		t 検定	
	M	SD	M	SD	t 値	d
学校への反発感傾向	2.308	(0.748)	2.441	(0.766)	-1.909	0.176
友人関係における孤立感傾向	2.251	(0.674)	2.140	(0.655)	1.828	0.168
登校嫌悪感傾向	3.171	(0.869)	2.898	(0.888)	3.438 ***	0.313
学業	1.683	(0.708)	1.641	(0.636)	0.727	0.063
先生との関係	1.161	(0.743)	1.179	(0.757)	-0.273	0.025
友人関係	1.061	(0.634)	0.920	(0.616)	2.536 *	0.227
テスト不安	0.623	(0.220)	0.524	(0.231)	4.925 ***	0.445
先生	2.644	(0.848)	2.775	(0.820)	-1.674	0.156
友達	2.906	(0.813)	2.986	(0.849)	-1.040	0.097
親	2.845	(0.849)	2.641	(0.863)	2.540 *	0.239

*** $p < .001$, * $p < .05$

Table 7 学校への反発感傾向（中国）

	大規模校		中規模校	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
学業	.209 ***	.233 ***	.020	.000
先生との関係	.386 ***	.271 ***	.417 ***	.334 ***
友人関係	.025	-.025	.194 *	.174 *
テスト不安	-.126 *	-.126 *	-.087	-.062
先生		-.275 ***		-.310 ***
友達		-.084		-.010
親		-.016		.061
R^2	.239 ***	.327 ***	.272 ***	.342 ***
ΔR^2		.088 ***		.070 **

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注: β の絶対値が0.150以上のものをボールド体で示した。

Table 8 友人関係における孤立感傾向（中国）

	大規模校		中規模校	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
学業	-.027	-.011	-.043	-.091
先生との関係	.080	.076	-.078	-.114
友人関係	.259 ***	.101 ***	.358 ***	.290 ***
テスト不安	-.105	-.051	.047	.092
先生		.060		-.192 *
友達		-.407 ***		-.265 ***
親		-.109		-.044
R^2	.084 ***	.236 ***	.115 ***	.248 ***
ΔR^2		.151 ***		.133 ***

*** $p < .001$, * $p < .05$

注: β の絶対値が0.150以上のものをボールド体で示した。

Table 9 登校嫌悪感傾向（中国）

	大規模校		中規模校	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
学業	.169 *	.180 **	.131	.092
先生との関係	.178 **	.107	.194 *	.128
友人関係	.179 **	.168 *	.252 **	.202 *
テスト不安	.055	.065	.059	.093
先生		-.168 *		-.229 *
友達		-.006		-.093
親		-.019		-.014
R^2	.184 ***	.212 ***	.198 ***	.259 ***
ΔR^2		.028 *		.061 **

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注: β の絶対値が0.150以上のものをボールド体で示した。

登校嫌悪感傾向 「先生との関係」(大: $\beta = .178$; 中: $\beta = .194$), 「友人関係」(大: $\beta = .179$; 中: $\beta = .252$) にストレスを感じているほど得点が高かった。また, 大規模校では「学業」ストレスサーも増悪要因となっていた ($\beta = .169$)。一方, 「先生」からのサポートが防御要因となっていた (大: $\beta = -.168$; 中: $\beta = -.229$)。

分析3: 中日対比

日本と中国の中学生が抱く登校回避感情ならびにその増悪要因, 防御要因, およびそれらの関連について, 両国のデータを比較対照して類似点, 相違点について検討する。

各尺度の国別比較

中国と日本の各尺度の平均値と標準偏差を Table 1 に示した。t 検定を行ったところ, すべての尺度について有意差が得られた ($|t| (1584-1783) \geq 4.326, ps < .001$)。「学校への反発感傾向」は日本の方が, 「友人関係における孤立感傾向」と「登校嫌悪感傾向」は中国の方が高かった。ストレスサーはすべて中国の方が高く, ソーシャルサポートは「先生」のみ, 中国の方が高かった。

登校回避感情の関連要因についての国別比較

学校への反発感傾向 (Table 3, 7) 両国とも, 大規模校では「学業」(日本: $\beta = .167$; 中国: $\beta = .209$) と「先生との関係」(日本: $\beta = .426$; 中国: $\beta = .386$), 中規模校では「先生との関係」(日本: $\beta = .385$; 中国: $\beta = .417$) が増悪要因となっていた。さらに, 中国の中規模校のみ, 「友人関係」($\beta = .194$) も増悪要因となっていた。一方, 「先生」からのサポートは両国の大規模校, 中規模校のいずれにおいても防御要因となっていた (日本大規模: $\beta = -.338$; 日本中規模: $\beta = -.396$; 中国大規模: $\beta = -.275$; 中国中規模: $\beta = -.310$)。

友人関係における孤立感傾向 (Table 4, 8) 両国の大規模校, 中規模校とも, 「友人関係」(日本大規模: $\beta = .288$; 日本中規模: $\beta = .335$; 中国大規模: $\beta = .259$; 中国中規模: $\beta = .358$) が増悪要因となっていた。一方, 「友達」からのサポートは両国の大規模校, 中規模校のいずれにおいても防御要因となっていた (日本大規模: $\beta = -.441$; 日本中規模: $\beta = -.463$; 中国大規模: $\beta = -.407$; 中国中規模: $\beta = -.265$)。さらに, 中国の中規模校においてのみ, 「先生」($\beta = -.192$) も防御要因となっていた。

登校嫌悪感傾向 (Table 5, 9) 大規模校では両国とも「学業」(日本: $\beta = .152$; 中国: $\beta = .169$), 「先生との関係」(日本: $\beta = .157$; 中国: $\beta = .178$), 「友人関係」(日本: $\beta = .255$; 中国: $\beta = .179$) が, 中規模校では両国とも「先生との関係」(日本: $\beta = .187$; 中国: $\beta = .194$), 「友人関係」(日本: $\beta = .275$; 中国: $\beta = .252$) が増悪要因となっていた。一方, 防御要因は, 日本の大規模校では「友達」($\beta = -.233$), 中国では「先生」(大規模: $\beta = -.168$; 中規模: $\beta = -.229$) となっていた。

考察

本研究の結果, 登校回避感情とその増悪要因としてのストレスサー, 防御要因としてのソーシャルサポートの関連は, 日本と中国の間で概ね似通っていたものの, 一部において差異が認められた。

これら、変数間の関連性の差異について考察する前に、各変数の文化差と学校規模による差についてまとめておく。

まず、登校回避感情のうち学校への反発感傾向では日本の方が、友人関係における孤立感傾向と登校嫌悪感傾向では中国の方が高かった。また、日本では学校への反発感傾向、中国では登校嫌悪感傾向のみ、大規模校の生徒がより高い値を示していた。さらに、4種のストレッサーはすべて中国の方が高く、「親」と「友達」からのサポートは日本の方が、「先生」からのサポートは中国の方が高かった。ストレッサーは、概ね学校規模が大きいほど高くなっていったが、中国では「学業」と「先生との関係」は規模による差は認められなかった。ソーシャルサポートについては、日本では「先生」からのサポートは規模が小さいほど高くなり、「友達」と「親」は中規模校の値が最も高かった。中国では「親」のみ、大規模校の方が高くなっていった。

日本と中国のいずれにおいても、進学に対する生徒間の競争は激しく、生徒は学業ストレッサーを強く感じていると考えられる。そして、その状況は大規模校でより顕著である。中国においてより強いストレッサーが生じている背景としては、科挙などの歴史的背景もあり、中国の子どもたちは勉強すること、高い成績を取ることが自分の完成のための大事な形と教えられているという実態がある（Chen & Uttal, 1988; Li, 2002; Tweed & Lehman, 2002）。さらに、中国の“一人っ子政策”は生徒に対する過度な期待を生じさせ、それを一身に背負って友だちとの競争にさらされるため、友人関係のストレッサーもより強くなっているようである。このような友だちとの競争的關係が、「友人関係における孤立感傾向」や「登校嫌悪感傾向」につながっているものと考えられる。一方で、先生からのサポートは中国の方が高くなっていった。「先生」という存在が日本以上に尊敬され、信頼される対象であることが、先生からのサポートの知覚を高めているものと思われる。

それでは、登校回避感情と増悪要因、防御要因との関連にはどのような傾向があるのだろうか。まず、学校への反発感先生との関係をネガティブに評価しているほど高く、ポジティブに評価しているほど低くなっていった。また、中規模校では学業ストレッサーも増悪要因となっていた。中国の中規模校のみ、友人関係ストレッサーも増悪要因となっていたのが特徴的である。次に、友人関係における孤立感先生との関係がネガティブであることが増悪要因に、ポジティブであることが防御要因となっていた。中国の中規模校のみ、先生からのサポートも防御要因となっていた点特徴的である。最後に、登校嫌悪感先生や友人との関係をネガティブに知覚しているほど高く、日本では友人関係を、中国では先生との関係をポジティブに知覚しているほど低くなっていった。大規模校においての、学業ストレッサーも増悪要因となることも両国で共通していた。

これらを通してみると、登校回避感情の増悪、軽減メカニズムは概ね両国に共通したものであるが、日本と比して中国では友人関係が防御要因になりにくいこと、先生との関係は防御要因として機能しやすいことがうかがえる。先述の通り、中国では教師が信頼、尊敬の対象として強い社会的勢力を持ち、不登校予防に対して影響力を持つ一方、過当競争の中で同級生は共に学ぶ仲間としてよりも競争相手として認識され、サポート関係が十分に確立されず、場合によっては「敗者」として学校から遠ざけてしまう危険性をも有しているものと考えられる。これらのことから、中国にお

ける不登校予防のための施策として、教師の影響力を有効活用すること、および仲間関係の形成を進め、同級生のサポート機能を高めることが必要であると考えられる。

本論文では、中国の場合、「親」のソーシャルサポートの有意性が見られなかった。それは、中国で調査した学校の地域性（両親とも出稼ぎに行っている留守児童が多い）に関連があると考えている。また、本研究ではソーシャルサポートの対象が親、先生、友達に限られているため、今後は広く考える必要がある。

引用文献

- Chen, C., & Uttal, D. H. (1988). Cultural values, parents' beliefs, and children's achievement in the United States and China. *Human Development, 31*, 351-358.
- Li, J. (2002). A cultural model of learning: Chinese "Heart and mind of wanting to learn". *Journal of Cross-Cultural Psychology, 33*, 248-269.
- 森田 洋司 (1991). 「不登校」現象の社会学 学文社
- 日本財団 (2018). 不登校傾向にある子どもの実態調査 Retrieved from <https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/information/2018/20181212-6917.html> (2020年8月31日)
- 岡安 孝弘・高山 巖 (1999). 中学生用メンタルヘルス・チェックリスト (簡易版) の作成 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 6, 73-84.
- 坂野 雄二 (1988). テスト不安の継時的変化に関する研究 人間科学研究 (早稲田大学), 1, 31-44.
- Sarason, I. G. (1972). Experimental approaches to test anxiety: Attention and the uses of information. In C. D. Spielberger (Ed.), *Anxiety: Current trends in theory and research*, Vol.2 (pp. 381-403), New York, NY: Academic Press.
- Tweed, R. G., & Lehman, D. R. (2002). Learning considered within a cultural context: Confucian and Socratic approaches. *American Psychologist, 57*, 89-99.
- 渡辺 葉一・小石 寛文 (2000). 中学生の登校回避感情とその規定要因—ソーシャル・サポートとの関連を中心として— 神戸大学発達科学部研究紀要, 8, 1-12.
- 翟 宇華 (2006). 中国都市部中学生の学校忌避感を抑制する要因に関する研究 教育心理学研究, 54, 233-242.

謝辞

調査にご協力いただいた日本、中国の中学生の皆さんと、研究実施校の先生方に感謝いたします。また、中国語版の質問紙作成にあたり、鹿児島大学大学院人文社会科学研究科の李 潔さん (当時)、鹿児島大学法文学部研修生の万 琮さん (当時)、宮崎公立大学人文学部の若林 萌さん (当時)、鹿児島大学教育学系の大淵 貴之先生にご協力いただきました。記して感謝の意を表します。